

慶応二年四月十二日より慶応二年四月十四日まで

P8310583 right

咄し有し書付持参の旨、同日正覚来り須崎村抱屋敷直組相談□、相頼正旨申聞由、今朝笠原(常)来り支配取扱被仰付、吹聴有し且右に付金子入用の義頼聞、先づ拾五円渡し遣、残拾五円は改遣し候、約信の趣、伊藤(幸)馬式疋率来、太助を伴い王子辺遠馬に行し旨、藤山稽古に来る例の通り設あり、伊藤(幸)太助を送り来る、途中にて飯を喫せしめし旨且新茶一小袋を贈らる
十三日寅 雨意終日

明日英ミニストル出府に付、右□前仏ミニストル、本日面晤いたし度、蒲田梅荘にて会晤の約申出の段、金港詰大久保

筑後守より急便文通届く、右に付再出張いたす義、並一昨ロセス対話筆記進達方等の義御城詰番へ文通いたし候、伊藤(幸)へ昨謝として洋鏡一面を為持、且手馬病に付、馬借用

P8310583 left

(一五郎来り)と云兒縁談の義□相談取進る旨咄有し)

(蒲田)の義頼遣す、笠原へ(使者にて)賀品(鯉節一折) 並昨頼□し金方為持遣す、朝第七時半過

出第十一時前

蒲田梅荘に至り午餐を喫す、第十二時ロセス 並カシヨン来る、席を設け一品を荘亭へ命じ

退後にさし出させ

御積り也、ハークスを懐柔する策、コンペニー詰問を解くの語等建白の義申聞る、帰途乗切使の同心に

出会詰り明朝例より早め登城いたし建白可致旨御沙汰の趣、田畑つる、金子八郎なるもの、家内になり

し吹聴として菓一折を携え寺山小女を紹介に頼み来る、同兒も小品持参何れもへ相当の酬品遣

せし旨、正覚抱屋敷願振書面下書持参の旨、柳亭稽古に来る、伊藤(幸)へ今朝馬を返し遣す

長蔵

抱屋敷一見の義申入に来る、且刀一本を示す

十四日卯 雨

山本(晋)初て来り面す(極凡庸)、出 殿仏ミニストルへ横浜並蒲田において、両度引合の件々周防守殿へ御直

(内は細字双行(二行に小さい文字で二行書き)などの場合です。

□印は解読未了の文字です。私の実力ではすぐ解読できません。

【文字判読不可】、■は、文章の一部に汚れ、虫食いにより文字が無い等です。